

～文化的歴史的所産を巡る～

残したい情景

第15回 新潟県新潟市

一般財団法人 日本不動産研究所



人情横丁は、新潟市で最も古い商店街の一つ



ユニークな小規模店舗が建ち並ぶ人情横丁

オフィス街から近い場所にひととき目を引く商店街がある。ユニークな小規模店舗が建ち並ぶ「人情横丁」（正式名称「本町中央市場商店街」）は、新潟市で最も古い商店街の一つであり、1951年昭和26年）に新潟市中央区に建

昭和感が漂う雰囲気から、テレビ番組でも紹介されることが、高度成長期における周辺

無地番地に続く人情横丁

埋め立てで消えた柳都

てられ、現在も当時の姿を残している。

昭和の雰囲気漂う

建築当初、それまで露店で鮮魚などを扱っていた業者が集まり、清潔な環境で食品を販売することを目的に、食品市場として運営を開始したとのことである。現在では、雑貨、駄菓子屋、カフェ、老舗寿司屋、その場で焼き魚が食べられる浜焼き屋、売り切れ必至の地元ラーメン店などの個性豊かな店舗が多い。その

があり、特に県外からの来訪者には独特でレトロな印象を与える商店街である。

商店街の雰囲気だけではなく、その経緯もユニークである。もともとは堀だった場所を埋め立てた場所にあるため、公図上の無地番地を新潟市から借りて、道路のよつな場所のご真ん中に建設されたことになる。昭和26年の建物

として、堅牢で耐火材が使用されたことから、新潟地震などの天災に耐えたほか、かつての堀で無地番地上在でも堀に関連

一方で消えてしまった情景もある。人情横丁が所在する古町地区は、かつては信濃川の豊富な水量を利用した水上物流の手段等として街中に堀が縦横に配



昔の西堀通（新潟市歴史文化課より）

した地名（西堀通、東堀通など）があるが、こちらは残念ながら当時の姿を見ることはできない。その堀と橋の周囲に柳が立ち並ぶ風情のある風景から、新潟は「柳都」（じゅうと）という呼び名があった。しかし、信濃川分水工事に伴う水量の低下、天然ガス採取による地盤沈下などから、水質は悪化して衛生面での問題となったほか、自動車の急速な普及に伴う道路拡張の必要性から、古町地区の堀は1950年代から1960年代にかけて次々と埋め立てられていった。時代のニーズ

に合わせた開発が進むことは避けられないものであったが、柳都と呼ばれるゆえんとなった当時の情景を見てみたかったと思わざるを得ない。また、全国でも街中に堀があることを観光資源としている地方都市があることを考えると、消えてしまったことが惜しまれる情景である。

話は戻って、天災や再開発の波もくぐり抜けてきた人情横丁であるが、建物の築年を考えると、今後どうなるかが気になるところである。合理性だけを考えると、かつて堀が埋め立てられたことと同様のことが起こるかもしれないが、新潟や古町地区の過去の姿を思い起こさせる象徴性の面からも検討してみるのは必要はあるだろう。（新潟支所／不動産鑑定士・山川剛）